

# ベルンハルト・ツィーグラ<sup>1)</sup> 「マクシム・ゴーリキーの遺産」<sup>2)</sup>

Bernhard Ziegler, « Das Erbe Maxim Gorkis » (1937)

アンリ・バルビュスが亡くなった時、そのような男たちの死は終わりであるだけでなく始まりでもある、と言ったのはマクシム・ゴーリキーだった。遺された作品の新しい生の始まり、作品は今こそ初めて完全に理解されるのだ。

マクシム・ゴーリキーが亡くなった日からの1年では、作家の遺作の解明はあまりうまくいかなかった。ひどい出来事が我々の注意を釘づけにしたままだった。しかし1年は、ゴーリキーの遺産のような作品の研究とリバイバルには短くもある。巨大な山々、人目につかぬ谷、手つかずの森、精巧に建てられた町、村や原野を含む、ひと目では見渡せない風景のように我々の前にそれは横たわっている。

これら全ての作品を概観し理解していると言える人は、今日ではたぶん誰もいないだろう。文化の歴史が我々に示すのは、偉大な芸術家の本当の理解には長い時間がかかると言うことだ。ホメロスがその才能を全体の広がりでは把握されるのには、何世紀も必要だった。ダンテが新しい生へと再び甦ったことを理解するためには、何世紀も数えなければならない。ほとんど同じように長い時間が、シェイクスピアの復活に要した。またゲーテやバルザックのような作品も、彼らの死後、おおよその理解がなされるのは、何十年かたって初めてである。

我々が所有しようと望んでいるゴーリキー作品の遺産は、それよりは容易に手に入るであろう。過去においては階級が、その先触れとして偉大な作家や思想家たちが現れた階級が、彼らの初期の理念や理想を性急に手放している。階級は、その階級的関心の歴史的枠組を突き抜けたこれら理念を、もはやその全体の大きさで認めることは許さなかった。

社会主義社会は、その始まりにおいてゴーリキーが先触れとして活躍したが、その青春時代からは何も手放す必要はない。その壮年期は、青春時代の拒絶ではなく、その充実なのだ。

人はゴーリキーを、当然のことながら、偉大なヒューマニストと呼んでいる。しかし、もし古い古典的なヒューマニズムの尺度で彼に近づくのであれば、彼を理解することにはならないだろう。ゴーリキーの全作品を貫く人間についての見解は、完全に新しいもののなのだ。ゴーリキーの場合、人間は文学の中で初めて自分自身の労働の産物として、その労働を通して全体として理解されている。ゴーリキーの造形したキャラクターたちの偉大さや弱さは、いつもその人物の仕事との関係から彼らの時間の中で定められている。我々は労働の同様の評価を、市民的人文主義の大いなる時代の始まりにおいて、いたるところで見出せる。ラティーニとボンターノは人間を、その労働によって定義する。この定義は、リカードやスミスで、サンシモンやヘーゲルでも繰り返されている。しかし市民社会は、その存在をどの程度支配者の非労働とよそ者の労働の搾取の上に築いているかの度合いに応じて、この労働が人を決めるという定義を再び断念したか、あるいは、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスター』や『ファウスト』の最後に見られるような、さえない名残をとどめるだけだった。

ゴーリキーはこの人間の解釈を初めて実際に実行し、彼の全ての作品をこの解釈の上に築いている。時々彼は、理論的にもまとめ、ほとんど誰にも気づかれないでいる、1933年に書かれた児童文学についての小論で、労働による人間の成長史の簡潔な見取り図を与えた。

新しく生じつつある社会主義社会は、まさしくあらゆるその行為に際し、まさに人間のこの見解を出発点とし、ゴーリキーの予言的な創作全体の大きさと深さを理解することを我々に可能にしている。ゲーテの真の理解と真の後継者がゲーテの死後の時代を支配してきた社会に対して抵抗することでのみ可能になることを、マクシム・ゴーリキーを理解し彼の後に続こうとする人は、彼が準備するのを手助けした社会と共に、始めることができるし、始めなければならないだろう。

1) [訳注] ドイツ共産党の文化活動家アルフレート・クレラ (Alfred Kurella 1895-1975) の変名。ブロッホによれば1937-38年「表現主義論争」のきっかけを作った人物とされる (エルンスト・ブロッホ「表現主義についての討論」(1938) (エルンスト・ブロッホ『この時代の遺産』池田浩士訳、水声社、2008年、pp. 584-601を参照)。  
2) [訳注] 翻訳に際しては以下を底本とした。Bernhard Ziegler, «Das Erbe Maxim Gorkis», *Das Wort: Literarische Monatsschrift*, Heft 6, Juni 1937, pp. 60-61。

ここに偉大な師の命日に、我々が義務を負うべき使命が始まる。ゴリキーが言うように作家の死後に始まる第2の生の展開を加速し、人類のためにマクシム・ゴ

リキーが遺した遺産を解明することは、我々の手に委ねられているのだ。

(訳：柴田隆子)